

織田武雄著

『古地図の世界』

本書は学界のみならず、ひろい読者層に地図史への関心を喚起した名著『地図の歴史』の続篇である。それだけに早や新聞の文化欄などでもとりあげられているが、「ロマンとファンタジーをさそう絵解き」あるいは、それぞれの「時代を反映した古地図の話題がぎっしり盛り込まれていて楽しい」等々の書評は、この本の一面をとらえているにすぎないように思われる。本書は単に関連のトピックスをひろい集め、時代順に配列した底のものではなく、一著の構成も実に用意周到というべきである。

即ち第一章「世界図の発達」では、十八世紀のクックの探検航海以前、なおひろく未知の土地に覆われていた地理的世界像が、古代バビロニア・ギリシア・中国などの「中華の世界図」、キリスト教系・イスラム系・仏教系の「宗教的世界図」、そしてプトレマイオスから大航海時代以後にいたる「科学

的世界図」に整理して概観され、自らすぐれた序説をなしているのである。これをうけて第二章「バビロニアの世界図」、第三章「プトレマイオスの世界図」と、古代を代表する作品がテーマに選ばれてゆくのであるが、たとえば粘土板の前者の写真は、高校の世界史や地理の教科書にもまま載せられ、われわれもすでに馴染のように錯覚しがちであるけれども、一読して、自分今まで知っていたのは、本章のタイトルだけではなかったのかと反省させられる。これは以下の章でとり扱われる例えばヘレフォード図、例えばカタロニア図など、すべてについて言えることであり、読者の多くは、これら著名な地図について、初めて「百科事典」や「地理学辞典」における数行の説明以上の詳説に出会うのである。むしろ、その逐一を紹介するわけにはいかないが、件の粘土板図が単純古拙な形態を示しているのも、元来、独立した世界図として描かれたものではなく、サルゴン大王の遠征譚に付された略図的な世界図だったであろうとの想定（二九頁）や、本図のごとくオケアヌスで囲まれた中世の世界図との類似を、「バビロニア人の宇宙観がへブ

ライ人を通じて聖書にも強く反映しているからである」（三二頁）等の指摘が印象的である。

第三章にもわれわれ地理学に従事する者に、斯学に対する根源的な考え方を思い出させるくだりがある。エラトステネスの造語「ゲオグラフィア」は、単に「土地を記載する」だけではなく、「図で描く」という意味が含まれているという点である。われわれが地図史研究に携わり、また地域調査の成果を地図に表現しようとする所以もここにあるわけだが、プトレマイオスもまた、地理学の目的を「ストラボンの記述的地理学と区別して、既知の世界、すなわちオエクメネ全体を統一体として図表化することにある」と見做したのであった。第二章ではまず、この目的のために考案した円錐投影法をはじめとする彼の地図作成法についての解説のあと、ヨーロッパ・アフリカ・アジア（後者を例にとれば、この中がさらに「イマウス山脈の内側のスキティア」「シルクロードのバミール通過路」「セリカに向かうシルクロード」「インド」「東南アジア」「インド洋の諸島」に細分される）というような地誌的区分に従い、プ

レマイオス世界図の記載内容に即して精細な考証が展開されるのである。これはヘレフォード図・カタロニア図等についても共通することだが、記載の個々の情報源を探り、他の史料と比較し、まさに博引旁証、「聖書」をはじめ、「ヘロドトス」「歴史」、「山海経」、プリニウス「博物誌」、「エリュトラ海案内記」、タキトウス「ゲルマニア」、玄奘「大唐西域記」、マルコ・ポーロ「東方見聞録」などが縦横に駆使され、へものしりへの著者の独擅場の感がある。しかも論述に従って、各世界図の当該地域を部分図に割って、原図の写真とそれに照応する凸版の解説図を見開き頁に並載するなど心憎いばかりの配慮が施されているのである。しかし、ブトレマイオスが情報の限られていた当時であって、貪欲に地理的知識を蒐集し、それをつとめて合理的に判断して取捨選択せんとした態度と、著者の爾々とした校勘の姿勢とが重なり合って、しばし読者を一種、アカデミックな醜態に誘うし、あるいは、中世の世界図を前にゴグ・マゴグが幽閉された城壁より脱出してキリスト教世界を劫掠する日への恐れを、いっしょに読者もへ中世に生きる人々へと共に

しているのである。

それだけにこの中世も後半を迎え、ガロン船やカラヴェル船が活動し、羅針盤やポルトラノの普及が進み、閉されていたヨーロッパとアジアや北アメリカとの交流が漸くさかんとする第五章の叙述に入ると、読者のこころも活気づいてくるような具合である。この期に生まれたカタロニア図を、著者は「ポルトラノを基礎にして描かれたポルトラノ型世界図であり、またヘレフォード図のような中世の世界図と大航海時代に発達する世界図との過渡期」(一六四頁)にあるものとして位置づける。つまりこのような時期に「ヨーロッパ人がどのような世界を想像していたかを、カタロニア図を通じて」考察したのが第五章なのである。では、こうしたヨーロッパ中心の世界像の変遷のなかで、果して日本はどのように把握えられてきたのか、――折しもかかる疑問が読者の胸に浮んできたところで、第六章「ヨーロッパの地図に描かれた大航海時代の日本」がくる。ここでは、イスラム地理書に登場するワクワクから、マルコ・ポーロの例のチバング、ベハイムの地球儀上の日本像を経て、以下、ルイシニ型・ガスタ

ルディ型・オーメン型等々よりティセラ図にいたる変容が、きわめて要領よく、かつ適確に語られる。

第七章と第十二章は、あるいは「楽しい古地図の話題」といえるかも知れない。それらは聖ブランドヌス諸島・アンティリア島など「地図から消えた島」(第七章)、ギリシア以来の和漢洋にわたるアマゾン伝説から「好色一代男」の「女護島」にいたる「女人国物語」(第八章)、すでにブトレマイオス図にも、また「南州異物志」や「瀛涯勝覽」などにも記録され、下つてはメルカトル図にもみえる「船をひきよせる磁石島」(第九章)、古代ギリシアの風神像などをとりあげた「地図の方位と風神」(第十章)、メルカトル地図帖の「表題のアトラスは、通説となっているギリシア神話のアトラスではなく、リビアの王アトラスを指していること」等を読む「アトラスの歴史」(第十一章)、プレ・コロンブス期におけるヴァイキングによる新大陸発見を裏証する史料として、一頃、問題になった「ヴィンランド・マップ」(第十二章)と興味ある「話題」が選ばれている。

しかしこれだけの「話題」を扱っても、

著者の地味な語り口は一向に変わらない。いささかの気取りも含まない淡々とした調子で、入念な考証が持続されるのである。巻末には各章の参考文献が付してある。

「古地図の話題が満載されていて楽しい」という巷間の書評も嘘ではないが、そのように感じるのには、著者と同じくらいに「調べもののたのしさ」を味わったことのある読者層に限られるであろう。これは平易な文体で啓蒙書を装いながら、実は高度かつ高踏的な一書であると思う。

(四六判 三一五頁 一九八一年十二月
講談社 一四〇〇円)
(矢守一彦 大阪大学文学部教授)

会 告

第三一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議(略称C I S H A A N、または国際東洋学会議)が左記の要項にて、開催されますので、御案内申しあげます。

会 期——昭和五八年八月三十一日(水)～
九月七日(水)。
会 場——(東京) 国立劇場ほか。
(京都) 国立京都国際会館。

登 録——締切本年七月末日。

登録料——昭和五八年七月三〇日までに納入の場合、三万円。それ以後、四万円。

部 会——「前近代の歴史的都市」ほか
一三テーマ。

なお、参加御希望の方は、登録申込書・学術プログラムなどにつきまして、左記にお問いあわせ下さい。

〒一〇一 東京都千代田区西神田二―四
—— 東方学会会館内

第三一回国際アジア・北アフリカ人文科学会議 運営委員会事務局
(電話〇三―二六二―七二二―三)

編 集 後 記

『史林』第六五巻第三号をお届けします。本号には、現代史・国史・西洋史の論説・研究ノートと、書評・紹介を掲載いたしました。史料の精緻な読解・現地の調査・コンピュータの利用など、まことに多彩な内容となっております。充分に御検討いただきたく存じます。さて、近年の編集後記を通覧しますと、

必ずといってよいほど刊行の「ズレ」が指摘されています。本号も御多分にもれず、いささか「ズレ」てしまいました。しかし、この「ズレ」のほかは、書評が幾分少ないとはいえ、編集はおおむね順調に行なわれています。これも、ひとえに会員の皆様の御支援によると考えております。今後とも御協力をお願いいたします。(西山)

一九八二年四月二十五日印刷 定価九〇〇円
一九八二年五月一日発行

史 林 (第六五巻第三号)

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部

発行人 史 学 研 究 会

理事長 樋 口 隆 康
振替京都七一五二五番

印刷所

京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社